



TITLE:

歓迎の挨拶

AUTHOR(S):

佐伯, 浩

---

CITATION:

佐伯, 浩. 歓迎の挨拶. 京都大学附置研究所・センターシンポジウム: 京都からの提言-21世紀の日本を考える (第8回) 「科学が見いだす日本の進路」 2014, 8: 3-5

ISSUE DATE:

2014-03-14

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187738>

RIGHT:

---

## 歓迎の挨拶

北海道大学総長 佐伯 浩



北海道大学総長の佐伯でございます。このたび京都大学主催のシンポジウム「京都からの提言」を開催するにあたりまして、本学も後援の形で参加しております。このように多数の方にご出席いただいたことを心からお礼を申し上げたいと思います。

本学の先生方の中にも、たくさん京都大学の出身の方がいらっしゃいまして、私も任期が間もなく終わりますが、次期の総長であります山口先生も京都大学のご出身でございます。そういう意味では、京都大学から非常に優秀な人材が日本に、あるいは世界中に輩出していると同時に研究成果、それが日本だけではなくて世界に広がっているということでございます。ただ唯一、大学の今までの欠点でございましたけれども、研究することには皆さん先生方は非常に熱心なんです、それを一般の方になかなか伝えない、分かりやすく伝えないというのが、今までの大学でございました。法人化してから少しずつ変わってまいりまして、今我々大学人が何をしているかということを出来るだけ国民の方に知っていただかなくてはならない、国立大学が法人化したといえ、お金の半分以上は国からいただいておりますから、それを還元する意味でも、それが非常に重要になっているわけです。

今日は、そういう意味で京都からの提言ということで、京都大学の附置研究所・センターの方々が参りました。京都大学の現状、将来の予測等のお話があろうかと思います。

京都大学は、20を超える附置研究所と大きな研究センターを持っておられるわけですが、本学は全部合わせても6つぐらいでございますから、その規模の違い、あるいは研究の範囲の違いというのは非常に大きなものがございます。

そのようなことから、こういう非常に幅広い分野の成果を聞くチャンスというのは、なかなか札幌では無く、非常に貴重な企画ではないかと思います。京都大学の研究所の方々のご英断に我々敬服したいと思っております。

実は私、専門が工学部の土木工学でございまして、先ほど京都大学の20幾つの研究所等々の中でも、特に関係が深いのは防災研究所でございます。神戸・淡路大震災があり、そのあと今回の東日本大震災等々には、この防災研究所の今までの研究成果、あるいは今回の災害に対する分析が非常に重要でございますが、そういう意味で我々土木工学的な面からも、防災研究所と非常に関係がございまして。

一方、私自身の研究からしますと、今から40年ぐらい前でございまして、東京大学に統計数理研究所というのがございまして、そこの赤池先生の、当時としては非常に数学者らしからぬ数学的教養、私たち素人が言ったら失礼かもしれませんが、ものを予測したり、不規則なものをどう捉えるかというようなことの成果がございました。私自身は土木のほうの海の波のこと

をやっていたものですから、赤池先生の研究論文をよく読ませていただいた記憶がございます。

ですから、専門分野は違いますが、研究の内容そのものは、予期しないところで使われているのではないかと思います。今回のような場も、自分の分野ではない先生方の話を聞くことが非常に自分のモチベーションを高めたり、研究の範囲を広げたりするのに役に立つのではないかと思います。

それから、もう1つ、私、出身が宮崎県の宮崎市でございます。私が小学校ぐらいのころ、宮崎県の一番南端に都井岬というのがございますが、ここは3～400年でしょうか、馬が放牧されたままで、半自然的な状態になっているところでございます。野生馬ということになっていますが、その研究に京都大学の先生方が来られたということを新聞で見ました。その直後でしょうか、今度は幸島という小さな島が、都井岬のちょっと北にあるんですが、ここに住んでいる猿が、芋を洗って食べるという新しい生活スタイルを見いだしたということも、京都大学の先生方が研究されたということでした。多分、霊長類研究所の方だと思いますけども、そういう方々の初期の研究の中に宮崎をフィールドにした研究成果があり、私の子どものころには、そのようなことが新聞に出て、「あっ、こういうことも研究の対象になるんだ」と感心したものでございました。

宮崎というのは、山に行きますと非常に猿が多いところでございます。別に猿を見たからといって我々が驚くわけでもなかったし、それが観光資源になるというような状況でもなかったんでございますが、それが研究の対象になると聞いたときは、ちょっとびっくりした記憶もございます。

また、私の親戚が都井岬で旅館をやっております。今から40年ぐらい前でしょうか、霊長類研究で非常に有名な今西錦司先生や、それと同じように当時の京都大学の錚々たる先生方が、よく泊まったそうです。そして年配の60近い人たちが熱弁をふるい、まるでケンカしているように見えた。宿の女将さんが言っていましたけども、そういう意味では、附置研究の中でも、私自身にとっては非常に個人的なつながりがあったというふうに思っております。

研究というのは、一見細分化しておりますし、その研究そのものを論文で研究するのも非常に大事ですけれども、京都大学の長い歴史の中で先生方について一番私が感激するのは、そういう研究の一番のエッセンスを非常に一般の方にも分かりやすく書くとか、講演会で分かりやすく説明するということについては、京都大学の先生が一番長けているのではないかと思います。成果は、もっといい成果を持っている人がほかにいるとしても、自分がやっていることを分かりやすく一般の人たちや専門家じゃない人に説明するというのは大変実があるかと思っております。

この度の企画も、まさに京都大学の持っている知を北海道の人々にまで広げてくれるということでは、非常にありがたい試みじゃないかと思っております。

今から1000年以上前でしょうか、菅原道真公が九州の太宰府に流されて「東吹かばにほひをこせよ梅の花」というような歌を詠んでおります。悲しかったこともあったろうし、京都

の文化を西へ持って来てくれということであつたんですが、今回は、まさにその逆でございまして、京都から東に向かって京都の新しい風、知識、教育、文化、最先端の成果、これを北の北海道に持ってきてくれるということになろうかと思います。

今回のこの試みに対しまして、改めて京都大学の研究所の方々、先生方に感謝を申し上げます。どうもありがとうございました。